ちょっとそこまで ～お散歩日和（名言編）～

そう、さびしいのよね。… マニング

そう、寂しいのよね。
だから、動きがとれなくなっちゃうんだわ。
…… オリヴィア・マニング

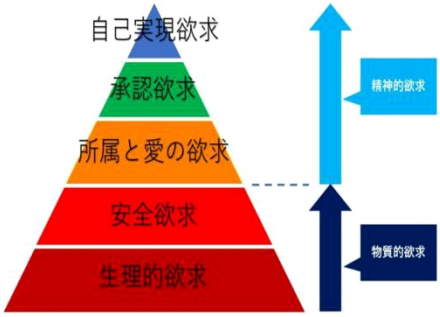
恋愛感情が暴走し、仕事が手につかず食事も喉を通らず、当たり前のことが当たり前にできなくなり、感情のコントロールがうまくいかなくなってしまう、それが若者の恋なのかもしれません。時には、恋の虜となり、盲目となり、相手を理想化し、時には苦悩に喜びさえ見出す事態に陥ることもあるようです。好きな人を尊敬する程度なら問題ありませんが、憧れの気持ちが強過ぎて神格化に繋がると、厄介なことになるのも、そう珍しいことではありません。それはまるでアイドルを推すのと同じような感覚で、好きな人に憧れる気持ちが強すぎるからでしょう。

百人一首を見ても、

・忍ぶれど色に出にけり我が恋はものや思ふと人の問ふまで（平兼盛）
・長からむ心も知らず黒髪の乱れてけさは物をこそ思へ（待賢門院堀河）

などは、かなりの狂いようです。他にも、

・相見ては暫く恋は和ぎむかと思へどいよいよ恋まさりけり（万葉集：大伴家持）
・誰に見せ誰に聞かせむ山里のこの暁もをちかへる音も（更級日記：菅原孝標女）



も、病いは相当進行していると言えるでしょう。

しかし、もう少し年齢を重ねた者たちの場合となると、空想や想像の世界を飛び越えて一気に切実な問題を引き起こすことが多いものです。しかも、その動機を「寂しさ」にあると言っているのです。孤独感と言い換えても良いでしょう。マズローの欲求５段階説を紐解くまでもなく、人は他者を愛し愛されることによって生きている実感を得られる生き物なのです。

ところで、中島みゆきの「あした」の中に、

「形のないものに誰が愛なんてつけたのだろう／教えてよ」

という一節があります。形がないからこそ、愛というものに無類の価値が付随的に生まれたような気もします。確かに、「愛」と言っておけば、表面上は美しいですし、分かったような気にもなるからです。

高校生の頃に一時期追っかけになって読み耽った作家に伊藤整がいます。とりわけ「鳴海仙吉」は、よく分からない主張が多かったのですが、必死で食い付こうと頑張った作品でした。そんな彼の「近代日本における愛の虚偽」という論文（？）もまた、当時はさっぱり意味不明でしたが、今なら少しは理解できます。その中に、

「他者を自己のように愛することはできない。我らの成し得る最善のことは、他者に対する冷酷さを抑制することである。」

という一文があります。もともと日本人の発想の根底には、「己の欲せざる所を人に施すことなかれ」という思想が流れているのであって、確かに、西欧人の言う「汝の敵を愛せよ」の教えなど、どう考えても無理な話なのです。

いずれにしても、社会で生きていくためには、寂しさや孤独感に耐え、強くたくましく、そして、明るく振る舞いながら生きていくことが要求されます。とは言え、それでその寂しさが消えるわけでもなく、少しでも心身のバランスが崩れると苦しさが激増するのですから困ります。

「人間の悪事はすべて、部屋の中でじっとしていられないことに由来する。」

とは、パスカルの言葉です。人生の一番手に負えない敵は、おそらく、この退屈や寂しさに違いありません。人はあまり意識していないけれども、この寂しさがあるからこそ、ある人はたえず誰かを愛しているふりをしていなくては耐えられず、ある人は友人と第三者の悪口を言い合って、お互いの友情を確かめずにはいられないのです。そこから、さまざまの悲喜劇が生まれ、芸術も生まれるのです。

・好奇心というものは、実は虚栄心に過ぎない。大抵の場合、何かを知ろうとする人は、ただそれについて他人に語りたいからだ。
・些細なことが私たちの慰めになるのは、些細なことが私たちの苦しみになるからである。
・人は恋愛を語ることによって恋愛するようになる。
・人間は偽装と虚偽と偽善に他ならない。自分自身においても、また他人に対しても。
・想像力は何でもやってのける。それは美と正義と幸福をつくるが、これこそ、この世における全てなのだ。

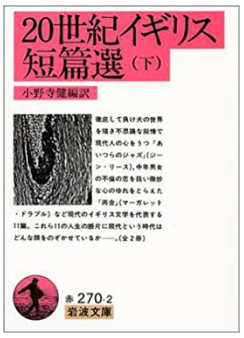
いずれもパスカルの言葉ですが、全て同根の箴言でしょう。

とは言え、パスカルの言葉で最も有名なのは「人間は考える葦である」と「もしもクレオパトラの鼻がもう少し低かったら」の方でしょう。どちらも「パンセ」の一節ですが、こういう名言の数々を目の当たりにすると、彼は一体何者なのだろうかという疑問が湧いてきます。

同じく１７世紀に活躍したデカルトもライプニッツもそうですが、当時、複数の分野にまたがって業績を残すことはそれほど特別なことではなかったようです。優れている人は何をしても群を抜いていたということなのでしょう。結局、彼は、哲学者、自然哲学者、物理学者、思想家、数学者、キリスト教神学者、発明家、実業家という肩書が並ぶことになります。と言いつつ、その中で、計算機の発明家だったことは案外知られていません。彼の生い立ちの中で数学との出会いがその後の人生を形作っていますから、当然の帰結だったのかもしれません。

数年前に見た映画「イミテーション・ゲーム」でチューリングが計算機を前に暗号解読に夢中になっているシーンが何度も出てきますが、そんなイメージで、寝食を忘れて計算機の発明に没頭してしまったようで、それがもとで寿命を縮めたと言われています。

ちなみに、私とパスカルとの出会いは、中１の時の「パスカルの原理」でした。圧力に関する基本原理ですが、さっぱり分からなくて、理科のテストはひどかったことだけよく覚えています。今の子供たちでしたら、天気予報の「ヘクトパスカル」という気圧の単位になるのかもしれません。



さて、冒頭の台詞は、マニングの短編「レディだけの旅」の一節です。これは、結婚に縁のなかった中年女性同士が、航海の旅に出かけ友情を深める物語です。その中で、煩わしさを感じつつも、何度も男を愛してしまう動機を語っている言葉ですが、ありきたりなのに誰にとっても痛切に響くのは不思議です。

（終）